

# 山の別荘の少年

豊島与志雄

青空文庫



私は一年間、ある山奥の別荘でくらしただけのことがあります。なかば洋館づくりの立派な別荘でした。番人をしていりる五十歳ばかりの夫婦者と、その甥おいにあたる正夫まさおという少年がいてるきりでした。私は正夫とすぐに親しくなつて、いろいろなことを語りあい、いろいろなことをして遊びました。たくさん思い出があります。そのいくつかをお話しましょう。

一 さくら

別荘の裏手の山つづきのところ、たくさん桜の木があら

した。春になるといっぱい花がさいて、家ぜんたいが、花にだか  
れたようになりました。

山奥の桜の花は、じつにきれいで、都会の公園の花のように埃ほこり  
をかぶっていませんし、平野の花のように色あせていません。花  
びらがみずみずしくてくつきりと白く、ほんのりと赤みがういて  
見えます。それが無数にさきみだれて、その間から、かわいい小  
さな葉が、緑色に笑いだしています。

朝日がさすと、白い綿のようですし、夕日がさすと、うす赤い  
綿のようです。月の光がさすと、夢のなかの雲のように見えます。

ある晩、私は窓をあけて、月の光がいっぱいさしてるなかで、  
桜の花をながめました。それから外に出ていって、花の下を歩き

ました。

幹の影と自分の影とが地面にくつきりうつつていましたが、花は月の光をおして、ぼーとうす明るく、まったく白雲しろくものようでした。

その白雲の下に、向こうに、正夫がぼんやり立っていました。

私はほほえんで近づきました。

「桜の花は、月の光で見るのがいちばんきれいだねえ」

正夫は私の顔を見たきり、いつまでもだまっています。

「どうしたの」と私はたずねました。

「だって、僕心配なもの」

「何が？」

「この木ですよ」

正夫が指さしたのを見ると、それはひととき大きな桜の木で、まるく枝をひろげて、しなうほどいっぱい花がさいていました。日傘ひがさの上に白い雲と月の光がつみかさなつたようで、じつにみごとでした。

その木を見てるうちに、私にも、正夫の心配がはつきりわかつてきました。

昼間のことでしたが、遠いところから、ここの桜の花のことをきいて、えらい人が見物けんぶつに来たのです。そして花を見てしきりに感心していましたが、ただ一つおしいことがある、といいだしました。それは、桜の花に匂においが無いということでした。

「これほどきれいに咲いてるのだから、これに、梅の花のようなよい匂いがあったら、さぞよいだろう」

その言葉を、正夫の小父おじさんがききとがめました。そして、どうかして匂いをつける仕方しかたはあるまいかと、相談しました。するとその人は、植物のことなら何一つ知らないことはないというほどえらい学者で、桜の花に梅の花のような匂いをつけてあげようと、引き受けたのでした。ある薬を桜の幹みきに注射するんだそうです。けれど、その薬はたいへんとうと貴いもので、たくさんはないから、いちばん立派な大きい桜の木を一本えらびました。

「一本でもけっこうです」と小父さんは叫びました。「それこそ、日本一の……世界一の……桜になります」

その注射が、今晚なされることになっていました。すると、明日、朝日がさす頃になると、桜の花は梅の花のようなよい匂いをたてるそうでした。

正夫は私の顔を心配そうにながめました。

「大丈夫でしょうか。注射って、いたいでしょうね」

「そうだねえ……」

考えてみると、私も心配になってきました。

けれど、もう仕方ありませんでした。向こうから、小父さんに案内されてあの人がやってきました。シルクハットをかぶり、ぴかぴか光る靴をはき、小さな鞆かばんをかかえ、ながい口髭くちひげをぴんとはやし、鼻眼鏡はなめがねをかけ、眼鏡めがねのふちから一本のほそい金鎖をた

らし、それを襟もとにとめていました。いかにもえらい学者のようでしたが、しかし、その鼻眼鏡のおくに光ってる目が、なんだか気味わるく思われました。

「ああ、この木でしたな」

学者はそこに立って、いっぱい咲いてる花を見あげました。それから、その根本にかがんで、鞆かばんをひらきました。しばらくかちやかちややってから、注射器をとりだしました。畳たたみ針はりのような大きな針がついていました。彼はしばらく、幹みきをなでていました。が、いきなり、ぶすりと針をさしました。

私はぞつとしました。私の手をにぎっていた正夫も、ぎくりとしました。桜の木は、私たちよりもいつそうびくりとふるえて、

花がひらひらとちりました。

学者は反対の方にまわって、も一度、注射の針をぶすりとさしました。花がまたひらひらとちりました。学者は鞆から小さな白っぽいものをとりだして、注射のあとにはりつけました。よく見ると、それはブリキの板でした。

「これでよろしい」

学者はそういつて、小父さんといっしよに戻っていきました。

私と正夫は、手をとりあつたまま、そこに残っていました。なんだか心配でたまりませんでした。

いつのまにか、月の光がうすれて、東の空が白んできました。どこかで、小鳥の声がします。そして、空に赤い光がながれて、

つめたい風がそよそよと吹いてきました。その時、桜の花がはらはらとちりはじめ、それと共に、たいへんよい匂においが、あたりにひろがってきました。

注射がきいたのでしょうか。たしかにそうでした。花がちるといつしよに、なんともいえないよい匂においが、あたりいちめんのだよつて、息をつくのも苦しいほどでした。けれど、どうしたところか、花はしきりにちつてやみませんでした。よい匂においといつしよに、白い花びらが、ひらひらひらひら、しきりにまいおちて、雪のように地面につまりました。そのきれいさ美しさは、何ともたえようがありませんでした。

そして、朝日の光がさしてくる頃になると、その桜の木の花は

すっかりちつてしまい、緑の小さな葉もちつてしまい、よい匂いもどこかに消えうせてしまつて、あとにはただ、はだかの枯木かれきが残つてるだけでした。

私は、その枯木をぼんやり見あげました。

正夫は、ふいに泣きだしました。

「小父さんに知らしておいでよ」と私はいいました。

正夫はかけだしていきました。

私は枯木にさわってみましたが、もうどうしようもありませんでした。ほかの木はいっぱい花をさかせ、小さな葉をだしているのに、その一本だけが、はだかのままで、さびしく立つてるのです。私はその近くを、いつまでも歩きまわりました。

がやがや、人声がしますので、ふり向いて見ると、小父さんが先にたつて、四五人の村人がやつて来るのでした。

なわのこぎりおの  
縄や鋸や斧をもっています。

私はびっくりして、口がきけませんでした。村人たちはもう、枯れた木に縄をつけ、その根本を、ねもとのこぎり、鋸でひいたり、おの斧で切ったりして、うちたおそうとしています。こーん、こーん……という斧の音が、私の胸にしみ通ります……。

はつと、眼をあいてみると、私は部屋の中になえているのでした。窓から、斧の音がひびいてきます……。

私はとび起きました。窓をあけてみると、ぱつと朝日の光がさして、向こうの桜の木立のなかの大きな一本の枯木が、かれき切り

たおされかかっているところでした。

私はいそいで着物をきて、そこに行ってみました。桜の枯木はもう根本ねもとを切られて、ぐらぐらしていました。それを、二三人の村人が、縄なわで引っぱりました。枯木は大きくゆらりとうごいて、それからさつと横だおしにたおれました。ほかの木の花がひらひらとちりました。

正夫が涙ぐんでそれを見ていました。

枯木のたおれたあとには、びっくりするほど、青い深い空が見えました。私はその明るい空を指さして、正夫にみせてやりました。

## 二 なままず

山奥といつても、南方なんぼうのことですから、夏はそうとうに暑く、水のほとりがなつかしくなります。

家から二三百メートルのところに、きれいな川がながれていました。川床かわどこは岩や小石で、ところどころに深みをつくり、そこには柳や杉などが岸にしげり、また浅瀬あさせとなり、そこにはこまかい砂で、芹せりや藻もなどの水草がはえて、小さな魚がおよいでいました。そして少しかみてが、滝とも瀬せともつかない急な流れでゆきどまりとなり、その下に、大人の胸ほどの深さのひろい淵ふちをこさえていました。

私と正夫とは、よくその川へあそびに行きました。

泳げるほどの大きな川ではないかわりに、水が清くつめたくて、飲んでもよさそうに思えるほどでした。浅い瀬にはいつて、美しい小石をひろったり、水草の間の小魚をつかまえたり、岸にねころんで釣りをしたりしてると、いつまでもあきませんでした。

かみての急流きゆうりゆうのところ、それを村の人たちは滝とって、滝の下の淵をきれいなものとして、よこてに小さな石のほこらなどがまつてありました。そこへ、私たちは朝おきるとすぐ、顔を洗いに行くこともありました。

ある朝、そこで顔をあらつておりますと、正夫が、あれツと叫んで、水にぬれた顔のまま、目をまんまるくうちひらいて、淵の

なかを見つめました。

「なんだい」と私はたずねました。

「なまず……とても大きななまずが……金色の髭ひげをはやして……」  
のぞいてみましたが、私には見えませんでした。もう岩にかくれたと正夫はいいました。けれど、たしかにいたというのです。一メートルもあろうか、びつくりするほどの大きななまずで、それが、ぴかぴか光る金色の髭をはやして、ゆつたりと泳いでいたそうです。

何かの影だったんだろう、と私はかんたんにかたずけて、気にしないつもりでしたが、それでもやはり、忘れかねていたようです……。ある日、私もそのなまずをはっきり見ました。

なまずというものは、おかしな魚ですね。頭がばかに大きくて、その大きな頭いっぱい、大きな口がついていて、こまかいきれいな歯をくいしばって力りきんでいて、上うわくちびる唇くちびるに長い二本の髭ひげをはやし、下唇に二本の短い髭をはやし、そのくせ、ごく小さなかわいい目でいつも笑っており、頭から尾へすーつとほそくなっています。そのなまずが、まったく、一メートルほどもある大きさで、おどろいたことには、ぴかぴか光る金のながい髭をうちふり、小さな目を光らし、いばりくさって悠然ゆうぜんと泳いでいったのです……。

それを、私も正夫も二人とも見たのです。

「いたでしょう」

「うむ、ほんとにいたよ」

けれども、金色の髭をはやしたなまず……そんなものは、まだきいたこともありません。

その淵ふちには、村の子供たちが時々釣にくることがありました。私はその子供たちに、この淵で大きななまずを見た者はないかとたずねてみました。

ここではよく釣つりばり針をとられるから、大きななまずかなんか、そんなものがいるかも知れない、という者がありました。

深いんだからきつという、という者がありました。

大きななまずをみたことがある、という者がありました。

そこで私は、金色の髭をはやしたなまずのことを、話してきか

せました。子供たちはびっくりしました。

「まだはつきりはわからないが、ほんとにその珍しいなまzugaiたら、みんなで生捕いけどろうじやないか。そしてここに池をつくつて、川の水をひきいれて、みんなで飼おうよ。このままにしておく、どこかに逃げてしまいかもしれないからね」

子供たちはすぐにさんせいしました。そしていろいろ用意をし、手はずをきめて、金色の髭ひげのなまzugaiをまちうけました。

そして毎日、朝から夕方まで、誰かしら番をして、淵ふちのなかをそつとうかがいました。ところが一日たち、二日たち、三日たつても、誰もなまzugaiを見た者がありませんでした。

四日めの夕方、私たちは淵のそばにあつまつて、がっかりしま

した。なまずはもう逃げたのかも知れませんが……。

「あ、いたいた……いたよ」

誰かの声が出て、みんなで見ると、たしかにいました。大きななまずが、金色の髭をはやして、淵の底のほうを悠然ゆうぜんと泳いでいきました。たいていみんなが見たのです。

すぐに、淵のしもての浅瀬あさせに築やなをはりました。これでもてに逃げることはできません。かみては滝ですから、そちらにも逃げられません。もう淵のなかにとじこめてしまつてのです。

私たちはよろこびいさんで、翌日の朝はやくから、淵にあつまりました。網や大ざるをもちよりました。そして裸になつて、淵のなかにとびこみました。

淵のなかは、あちらこちらに岩があり、岩の下には洞ほら穴あながあり、小石がごろごろしていましたが、ごみはなくてきれいでした。深さは大人の胸ほどで、滝の水が一方からざあざあおちこんでいます。そのなかで、網をはる者、しゃくう者、水にもぐる者、おさわぎでした。

けれど、金色の鬚ひげをはやした大きななまずは、いつこうに見つかりません。手や足にさわった者さえありません。大きななまずどころか、ほかのめぼしい魚もいず、淵ふちのなかはがらんとしてるようでした。

それでも私たちは、一日あさりつづけました。身体からだがひえると、着物をまとって、草原の上にねころんで、てりつける太陽の光に

あたりました。夕方ちかくなると、焚火たきびをしました。だんだんが  
つかりしてきて、口をきかなくなりました。もうだめのようにし  
た。

その時です、いちどに両方から声がしました。

「いたよ、いたよ」

淵のなかと、西の空と、両方をむいてです。西にかたむいた太  
陽が雲にかくれようとしていて、そのきれぎれの雲の一つが、な  
まの形になって、金色の髭をはやしていますし、それがそのま  
ま、淵の水のなかにもうつっています。それを、私たちが両方見  
くらべてるまに、もうすーっと、雲の形はくずれ、淵のなかのも  
消えてしまいました。

私たちはあっけにとられて、言葉もでませんでした。

けれど、それからというものは、朝や夕方の雲の形に、なんと  
なまずが多くなつたことでしょう。そして淵のなかにも、なんと  
なまずがたくさんになつたことでしょう。みんな、金色の髭をは  
やした大きな珍しいなまずでした。

### 三 かき

家のまえに大きな柿かきの木がありました。いっばいなつてるその  
柿が、秋になると、赤く色づきました。

私と正夫はそれをたくさんたべました。あそびにくる村の子供

たちにもわけてやりました。朝露あさつゆにひえたつめたいのをかじるのが、いちばんおいしくありました。

そして柿は、まもなくなくなってしまう、ただ一つだけ、たかい梢こずえにのこりました。ずっと空たかくつきでた枝の先に、たった一つなっているのです、登ることもできず、竿さおもとどきませんでしたが、それよりも、そのいちばんたかい一つだけは、ただなんとなく残しておいてやりたかったのです。

その一つの柿は、まるで柿の木の旗みたいでした。まんまるな大きなもので、朝日や夕日に赤くかがやきました。

山奥の秋は、早く寒くなります。やがて、柿の葉は黄色くなり、下枝したえの小さな柿や、半分われた柿なども、すっかり熟して、小鳥

にたべられてしまい、黄色い葉はだんだんちつていきました。けれど、たかい梢の一つの柿は、もうやわらかく熟しながらも、やはりついていました。

私はそれが気がかりになってきました。もうあんなに熟してしまつてるのに、いつまでああしてつもりなんだろう。下におちるかしら。それとも小鳥にくわれるかしら。くわれるとしたら、何の鳥にだらうかしら。

正夫も同じようにそのことを考えていました。

そして私たちは、できるだけその柿かきを見ていることにしました。下におちるか、どんな鳥にくわれるか、それとも……。

家の庭から、その柿がま正面に見えました。風のあたらない、

日のよくさす、暖かい片隅かたすみに、腰掛こしかけをもちだして、私は正夫に本をよんできかせながら、二人とも時々目をあげて、梢こずえの柿をながめました。青くすみかえった空たかく、柿は赤々とかがやいています……。

その柿と同じような赤い着物を、巡礼じゆんれいの赤ん坊がきていたのです。巡礼じゆんれいというのは、まだ三十歳ばかりの女で、菅笠すげがさ、手て甲つこう、脚絆きやはん、笈摺おいずる、みなさつぱりしたみなりでしたが、胸むねに赤ん坊をだいていました。おずおずと庭にはいつてきて、静かなひくい声でいいました。

「今晚、どこでもよろしゅうございますから、お宿を、お願い申したいんでございますけれど……」

赤ん坊なんかだいているへんな巡礼でしたけれど、その赤ん坊の着物が柿の色と同じようなので、私はなんだか泊めてやりたい気がしました。

正夫も同じ気持ちだったのでしょう。小父おじさんをさがしに家のなかにかけていって、まもなく戻ってきました。

「泊ってもいいんだって……」

巡礼の女は、うれしそうにおじぎをしました。

「それでは、夕方まいりますから……」

そして出ていきました。

私と正夫は目を見合わせました。どうもへんな巡礼なんです。

「僕が見てきましょう。へんだなあ……」

正夫が巡じゅんれい礼れいのあとをつけていったので、私は一人でぼんやり夢想むそうにふけりました。

ながい時間がたったようでした……正夫が戻ってきました。巡礼の赤ん坊をだいてるんです。にこにこ笑っていました。

「おかしな女ですよ。赤ん坊をわらのうえにねかしといて、自分  
はたんぼのなかにはいりこんで、落穂おちほをひろいはじめたんです。  
だんだん向こうへ遠くへいつちやうんですよ。僕この赤ん坊がか  
わいそうになったから、だいてきてやりました」

「どれ、かしてごらん」

私はその赤ん坊をだきとりました。赤ん坊はまだすやすや眠つ  
ていました。ふうわりと軽くて、まるで綿わたのようで、頬ほほをつつい

てみると、つるつるしてやわらかで、かすかに乳ちちの匂においがしていました。

けれど、あんまり軽くて手ごたえがないので、やがて心配になりました。正夫といっしょに、巡礼の女をさがしに行きました。

秋の日がいちめんにてっていました。見わたすかぎり、野山のやまは黄色く、とりいれのあとのたんぼはくろずみ、空は雲一つなく晴れわたっていました。

ピーヒョロヒョロ、ピーヒョロヒョロ……。

とんびの聲がします。一羽のとんびが、空たかくゆつたりと舞っているのです。

向こうのたんぼのなかに、五六人の村人たちが、巡礼の女をと

りまいて、何やら大声をたてていました。そしてみんな、空をあ  
おいで、とんびを見てさわいでいました。私も見あげました。よ  
く見ると、たくましいとんびで、足に何か赤いものをつかんで大  
きく円をえがいてとんでいます。ピーヒョロヒョロと、さもうれ  
しそうにゆったりと舞っているのです。私は村人たちの方へやつ  
ていきました。

近くまで行くと、私の方を見て、  
巡じゅんれい礼の女が、いきなりか  
けだしてきて、私にすがりつき、赤ん坊にすがりつきました。

「まあ、よかった。ここにいたのね……無事でいたのね……よか  
ったわねえ……お母さんは、あなたがとんびにさらわれたと思っ  
て……さらわれたんだったら、どうしよう……まあ、よかったわ

ね……」

むちゆうになって、赤ん坊をだきしめて、さめざめと泣いてるんです。

私はこまって、ぼんやり立っていました。

村人たちがあつまってきました。

「赤ん坊がさらわれたのではなくて、よかったよ。だが、あれは何だろう」

とんびはなにか赤いものを両足にひきつかんで、その両足をちぢめて腹にくっつけ、大きく羽をひろげて、羽ばたきひとつせず、ふうわりと宙にうかび、さもうれしそうになきながら、舞いとんでいます。日の光をいっぱいふくんだ青い空のまんやかに、その

姿がつややかに光っています。

村人たちは赤ん坊のいる家の名をあげたりして、心配そうにながめていました。

「あ、そうだ」

柿<sup>かき</sup>のことがはつと頭にうかんで、私はかけだそうとしました。

その私の肩を、誰かがとらえてゆすぶりました……。

正夫が私をゆすぶってるのでした。

「本をよんで下さらないから、僕うとうとしちやっただです。すると、柿<sup>かき</sup>がなくなってるんです」

私もはつきり目をひらいて、見ると、梢<sup>こずえ</sup>の柿がいつのまにかなくなっていました。

私たちは、柿の木の下にかけていきました。けれど、いくら探しても、あのまっかな柿はその辺におちてはいませんでした。わずかな間に、小鳥がたべてしまったはずもありません。

とんびは……やはり一羽、空高く舞っていました。足には何にもつかんではいませんでした。ただいかにもうれしそうに、ピーヒョロヒョロと、ゆったり舞っていました。

#### 四 山の小僧こぞう

山のなかは、冬になると、天気が変わることが多く、そして雪がふりだすと、なかなかやまず、十四五センチもすぐにつもって

しまいます。

そういう時、私は西洋室の方にうつつて、だんろに薪をどしどしたきます。正夫も私のところで、夜おそくまで話しこんでゆることがありました。

正夫は星の話をきくのがすきでした。私は知ってるだけのことを話してやりました。太陽系のこと、ことに金星のこと、それから水星や火星や木星や土星のこと、大熊星座おおくませいざのなかの北斗七ほくとしちせ星いのこと、小熊星座のなかの北極星のこと、次には、アンドロメーダ星座、ペルセウス星座、牽牛星けんぎゆうせいと織女星しよくじよせい、銀河ぎんがのこと、彗星すいせいのこと、そのほかいろいろのことを話しました。そして私がびっくりしたのは、正夫が空の星の図を、名前はわから

ないでもよく知ってることでした。

「さびしい時には星をみるがよいと、何かで読んだことがあります。それで僕はよく星をみてるんです」

正夫はそういつて、でもさびしそうにほほえみました。父も母も小さい時になくなって、正夫は一人者なので、小父おじさん夫婦のところにはひきとられてるのです。

「星をみてる、ほんとにいいんです。だれか親しいやさしい人が、こちらをじつと見ていてくれるような気がしますよ」

それから正夫は、またさびしくほほえみました。

「冬になると、星の見えることが少ないからつまらないんです。

それに、こんなに雪のふる晩は、急にさびしくなることがあります

す。だれか今にも来そうなんです。僕がよく知ってる人だが、どんな人だかはわからない、そういうへんな人が、やって来るような気がしますよ」

私はだんろに薪をくべて、さかんにもやしました。あまりあつくなると、らんまの小窓を少しあけました。外には雪がふりしきつていました。

「でも、そんなへんな人でなく、おもしろいものが、ほんとにやって来ることもありますよ」

「どんなものが……」と私はたずねました。

「いろんなものです。鳥や獣けだものや、それから……。あんな小窓をあけておくと、火にあたりにくるんでしようね、狐きつねや狸たぬきがとびこん

でくることもありますよ」

私はらんまの小窓を見あげました。正夫は話しつつづけました。

「それよりも、面白いのは鳥ですよ。いつだったか、部屋いつぱ

い鳥だらけになったことがあります。雀すずめがとびこんできました。

頬ほお白しろがとびこんできました。つぐみがとびこんできました。山や

鳩まぼとがとびこんできました。鳥からすがとびこんできました。そのほか

いろいろな鳥が、次から次にとびこんできて、部屋いっぱいにならびました。ふしぎなことには、どれもみなだまつてるんです。

目ばかりぱちぱちうごかして、なき声は少しもたてないんです。

そしておかしいのは、鷺さぎですよ。みんなといっしょに、小窓から

とびこもうとしますが、足をまげることがをしないものだから、そ

の長い足がつかえて、はいれないんです。なんども、小窓にとびついてはおちるんです」

私はまた、らんまの小窓を見あげました。

「それから、いちばんずるいのは、山の小僧こぞうですね。なんでしよう、あれは……。一寸いっすんぼうし法師みたくで、そして全身はまつ白で：

……。帽子をかぶってるのか、髪の毛がのびてるのか、わかりません。マントをきてるのか、身体からだじゆう毛がはえてるのか、わかりません。靴をはいてるのか、はだしなのか、わかりません。ただ、全身まつ白なんです。……ああ、来たんじやありませんか」

私は小窓を見あげました。

「あんなずうずうしい奴やつはありませんね。おおさむこさむ……。歌

でもうたうような調子で、けれど声には少しもださずに、ただそういう顔つきで、小窓からとびこんでくるんですよ」

私は小窓を見あげました。外は雪がふりしきっていました。

「とびこんできて、あいさつ挨拶もしなければおじぎもしないで、ひよいとそのへんの椅子いすの上ののつかるんです。そしてだまったまま、笑顔ひとつしないで、じつとしてるんです。あいつがはいつてくると、部屋のなかがぞつと寒くなりますよ」

私はなんだか寒くなつて、部屋のなかを見まわしました。

「こつちでじつと見ていてやると、そのままのこのこと部屋の隅すみつこにかくれたり、布団ふとんのなかにもぐりこんだりします。そしてあたりがしいんとしてきて、耳をすますと、まだ外には、仲間が

いくたりも、十も百も千も、たくさんいるらしんです。はいってくるのは一人ですが、外にはおおぜい待ってるんです」

私は耳をすましました。雪のふる音がきこえていました。

「ゆだんしていると、はいりこんできた奴が、だんだん近よつてきて、背中にぴったりくつついたり、どうかすると、襟の間から懐ふところの中にとびこんできます。ひやりとしますよ……」

私はぞつとして、いきなり立ち上がりました。そしてらんまの小窓をしめました。

もうだんろの火はほそくなっていました。私はあらたに薪まきをくべました。そして、わきを見ると、正夫は肱掛椅子ひしかけいすの上すに、うとうと眠っていました。

しいんとした静けさで、雪のふる音だけがかすかにきこえます……。はて、今まで私に話しかけていたのは、いったい誰だったのでしょうか。眠っているところを見ると、正夫ではないし、私自身のはずはないし、ほかにだれもいませんでした。

しんしんと雪のふってる夜ふけです。

私は立ち上がって、そつと正夫をだきよせました。正夫はうつとり目をひらいて、私を見てとると、きつくだきついてきました。それを私はやさしくだきしめてやりました。

だんろの火がぱつともえたとっていました。





# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山の別荘の少年

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>